第５回　中心部震災メモリアル拠点検討委員会

日　　時　令和元年10月28日（月）　15：00～17：20
会　　場　市役所本庁舎２階　第２委員会室
出 席 者　植田今日子委員、遠藤智栄委員、大泉大介委員、佐藤翔輔委員、佐藤泰委員、志賀理江子委員、野家啓一委員、マリ・エリザベス委員、本江正茂委員
議　　事　１　開会
　　２　議　事
　　(1) 中心部震災メモリアル拠点の役割及び機能について
　　(2) 今後のスケジュールについて
　　(3) その他
　　３　閉　会

配布資料　資料１　第４回検討委員会までの意見整理
　　資料２　中心部震災メモリアル拠点の方向性と役割について
　　資料３　中心部震災メモリアル拠点の構成要素について
　　資料４　今後のスケジュールについて

○事務局（庄子課長）
　定刻となりましたので、ただいまから第５回中心部震災メモリアル拠点検討委員会を始めさせていただきます。本日は、お忙しい中お集まりいただきまして、ありがとうございます。では、本日の議事進行につきましては野家委員長にお願いしたいと存じます。委員長、よろしくお願いいたします。

○野家委員長
　皆様、よろしくお願いいたします。それでは、会議は議事次第に従って進めてまいります。まず、本日の会議に係る留意点等につきまして、事務局から説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）
　それでは、着席のまま説明させていただきます。初めに傍聴の方へのお願いです。本日お配りしています「会議の傍聴に際し守っていただきたい事項」をお守りの上、傍聴席以外に立ち入らないようお願いいたします。
　次に、配布資料を確認させていただきます。本日は、委員の皆様のお座席に、次第と委員名簿、座席表、資料一覧、資料１から４を置かせていただいております。資料の不足がございましたら事務局までお知らせください。
　続きまして、本日の出席状況について報告いたします。本日は、9 名の全委員にご出席いただいておりますことから、要綱第５条第２項による定足数を満たしていることをご報告申し上げます。それから、本日も議事録を作成いたしますので、ご発言の際はマイクを使ってお話しください。事務局からの留意点は以上でございます。

○野家委員長
　はい、ありがとうございました。それでは、議事に入る前に、本日の議事録署名委員

を指名させていただきます。前回は大泉委員にお願いしたところですが、本日は佐藤翔輔委員にお願いしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○佐藤（翔）委員
　はい、分かりました。

○野家委員長
　ありがとうございました。それでは議事に入らせていただきます。まず、議事の１番目、中心部震災メモリアル拠点の役割及び機能についてです。まず事務局から内容の説明をお願いいたします。

○事務局（庄子課長）
　それでは、中心部震災メモリアル拠点の役割及び機能について説明いたします。資料1から資料3まで続けてご説明をさせていただきます。
　まず資料1「第4回検討委員会までの意見整理」と資料2「中心部震災メモリアル拠点の方向性と役割について」をご覧ください。
　資料1は、第4回検討委員会までの意見整理になります。1ページ目、概要版になっております。第4回で出た意見と重複する箇所を網かけで示し、そのうち第4回の意見で新たに追加した箇所を下線で示すと書いてございますが、前回、拠点の軸についてお話をしておりますので、これまでの議論と重なった部分もございます。そちらは網かけで示しております。なお、新たに追加した箇所でございますが、下線と網かけ両方入っておりますが、下線を引いた箇所は今回新たに追加された部分でございます。
　では、こちらの資料は細かく説明いたしませんが、こちらの資料を踏まえて、資料 2「中心部震災メモリアル拠点の方向性と役割について」を事務局のほうで整理いたしました。整理の内容については後ほど委員長から質疑応答をしていただきます。
　では、まず背景です。背景として、東日本大震災はどのような経験だったのか、そして仙台市の中心部で展開する意味は何かということをこれまでずっと整理してまいりました。東日本大震災はどのような経験だったのかは、どのような出来事で、どのような経験があったのか、また中心部で展開する意味は何かという部分については、仙台の特質とは何か、そして中心部の場所性とは何か、この部分について議論を重ねてまいりました。これを踏まえて、拠点の軸ということで前回お話をいただいたわけですが、第 4回の検討委員会で拠点の軸として上がった内容、(1) 何をするのか、(2) どのようにするのか、(3) 何を目指すのかという内容で事務局でまとめさせていただきました。
　(1) 何をするのか
　①記憶を語り合う、②議論し続ける場、③起きたこと自体を忘れない、④被災各地の活動と連携、この部分について論点を書いてございます。
　(2) どのようにするのか
　①身近な場、開かれた空間、②多様な主体の参画、③人の力と組織、④時代に応じて変化し続ける場、この観点についてまとめたものがこちらです。
　(3) 何を目指すのか
　①新たな社会のため、②災害文化の拠点、こちらの観点で資料をまとめてございます。
　この上で、拠点の基本的方向性としまして、3番、読み上げをいたします。

「東日本大震災をはじめとする災害の経験を活かし、災害とともに生きる社会のあり方を災害文化として、多様な主体とともにその時代にふさわしい形で継承、創造し、災害文化を持つ都市仙台としてのアイデンティティーを構築するとともに、そこで得た知見を国内外に発信する」、こちらを拠点の基本的方向性としてまとめさせていただきました。

これを踏まえた拠点の役割です。これを踏まえて事務局でまとめました拠点の役割、読み上げさせていただきます。

(1) 多様な経験の共有・蓄積・発信

災害にとともに生きる都市として、長きに渡り様々な角度で災害の経験を捉え、考察・発信し続けるためには、東日本大震災をはじめ、これからの災害においても語り合いなどを通じた経験の共有や、その蓄積が必要である。

(2) 新たな知恵の創造と社会への実装

災害とともに生きる都市として、あらゆる危機においても臨機応変に対応できる社会を形成するために、多様な経験をもとに議論し、市民のアクションにつながるアイデアや学びのプログラムを創造するとともに、社会で実践していくことが必要である。

(3) 超長期の記憶の継承

東日本大震災は、個人の想像を超え、一生に一度未満という極めて特殊な出来事であり、個人が生きる時間を超えた超長期で、起きたこと自体を伝えていく必要がある。

(4) 広域的な連携

甚大かつ広域複合的な災害について、全てのことを1か所で伝えることはできない。東北の拠点都市、そして多様な被災現場を持つ仙台市の中心地・玄関口として、市内はもとより東北の被災各地の施設・団体・個人とネットワークを形成し、相互に協力することで、情報や知恵を共有しつつ、来訪者を各地につないでいくことが必要である。

この役割を発揮するための必須事項として、5 番、(1) 多様な主体の参画、市民をはじめとした多様な主体の参画により実行していくこと、(2) 開かれた存在であること、いかなる時代においても、あらゆる人に開かれた存在であること、(3) 人材に力点を置いた展開、拠点の役割を担うための人材を育成しつつ、拠点に関わる人々が継続し、集中して取り組める環境があること、このように整理いたしました。

続いて、資料3を説明させていただきます。拠点の役割について、事務局として資料2のように整理をさせていただきましたが、今回の第5回検討委員会では、資料2でまとめました、(1) 多様な経験の共有・蓄積・発信、(2) 新たな知恵の創造と社会への実装、(3) 超長期の記憶の継承、(4) 広域的な連携、これらの役割を果たすために、資料3 に挙げております要素がどのように機能するのか、そして、役割及び要素についてどのように力点を置くべきか、これらを論点として議論していただきたいと考えております。

なお、拠点の要素ですが、これまで検討委員会で出た意見から事務局で抽出いたしました。大きくは7つ、①空間、⑤象徴的存在、⑩メディア、⑪アーカイブ、⑫フューチャーセンター、⑬人材、⑮財源、また、①空間の中では②施設、③展示、④広場について、⑤象徴的存在の中では⑥モニュメント、⑦音、⑧行事、⑨歌について、⑬人材の中では⑭組織について、言及いただいております。

今回の議論を踏まえまして、今後事務局が拠点の具体像に関するケーススタディー調査を実施する予定です。

ケーススタディーは、次回以降の資料に挙げていく予定ですが、現段階で事務局が想定している検討委員会報告書の構成案は次のとおりでございまして、以降の検討委員会で順次議論をしていく予定です。

序文、拠点の方向性、背景、拠点の役割、役割を発揮するための必須事項につきましては、本日の資料2までででご確認をいただければと思っております。

拠点の具体像につきましては、各ケースに従い、その全体像や各機能の具体像、その評価、メリット・デメリットなどを考察していきたいと考えております。

その後、拠点の具体化についての要件、留意事項、検討経過という流れで構成することを現時点で想定しております。

事務局の説明については以上です。

○野家委員長

はい、ありがとうございました。今説明いただきました資料3の論点については後ほどもっと詳しい議論をいただきますが、とりあえず資料1、これはこれまで4回のこの会議のまとめをしていただいたものです。それから、資料2は拠点の方向性と役割について事務局でポイントをまとめていただいたものですが、この資料1と2について、何か疑問点とかあるいはご意見とかコメント、何でも結構ですが、ございましたら発言をお願いします。

○佐藤（翔）委員

東北大の佐藤です。このようないっぱいのブレストをこのようにまとめていただいて、事務局の皆様、ありがとうございます。

最初確認させていただきたいんですけれども、資料1をもとに資料2を作成されたと思いますが、3 は要素を抜き出したということで、何となくやり方、理解できるんですけれども、資料1から資料2をつくられた流れみたいなものを簡単に教えていただけますでしょうか、全部を抽象化してこれをつくったのか、何かの基準で抜き出してつくったのか等々、その作成の過程をちょっと共有させてください。お願いします。

○野家委員長

ありがとうございました。それでは事務局から説明をお願いします。

○事務局（庄子課長）

それでは、資料2をつくった経過でございます。前回、拠点の軸として何をするのか、拠点の軸としてどのようにするのか、そういったようなことをお話いただいておりますが、これを、東日本大震災がどのような出来事であったのか、それから拠点の軸として何を目指すのかとクロスをさせまして、役割のほうを抽出してきたところでございます。

○佐藤（翔）委員

2「拠点の軸」については第4回のものを展開されたということですね。

○事務局（庄子課長）

そうです。

○佐藤（翔）委員
　ありがとうございます。それでは、資料２が資料１をもとにどうつくられたかを教えていただけませんでしょうか。

○事務局（庄子課長）
　資料２の１「背景」と２「拠点の軸」に関しては、前回の意見を抽出したものでございます。3「拠点の基本的方向性」はそちらをまとめたものでございます。

○佐藤（翔）委員
　3「拠点の基本的方向性」は、1「背景」と２「拠点の軸」をまとめたものなんですね。

○事務局（庄子課長）
　はい、そうです。

○佐藤（翔）委員
　分かりました。

○事務局（庄子課長）
　4「拠点の役割」に関して、その背景に東日本大震災という歴史的規模の災害の中で１つにくくることができない多様な経験があり、また、この中心部が多様な被災現場を持つ仙台の中心地であるというで、拠点の軸として「記憶を語り合う」ということは、つまり「多様な経験の共有・蓄積・発信」であると捉えました。
　同様に東日本大震災という経験は社会のあり方も問われた経験であって、仙台の特質には市民力のまち、繰り返してきた災害の歴史ということもございますので、「議論し続ける場」というのは、つまり多様な経験の議論を通じた「新たな知恵の創造と社会への実装」であると捉えました。
　また、今回の東日本大震災を通じて記憶や経験をつなぐことの困難さと重要性を認識したところでございまして、本市が防災環境都市と称してまちづくりを進めていくことも考えると、「起きたこと自体を忘れない」ということは、つまり、東北のハブとして多くの人が行き交う仙台の地において、「超長期で記憶を継承」する象徴が必要ではないかと捉えました。
　そして、1 つにくくることができない多様な経験がある中において、東北の拠点として、「被災各地の活動と連携」するということは、つまり「広域的な連携」が必要であると捉えました。

○佐藤（翔）委員
　ありがとうございます。そういう意味では、1「背景」と２「拠点の軸」から４「拠点の役割」を集約しているという理解でよろしいでしょうか。

○事務局（庄子課長）
　はい、そうです。

○佐藤（翔）委員
　可能であれば、もう少し視覚的に今度お見せいただけませんか。今、対応関係が分からなくて、抜け漏れはないと思っているんですけれども、ちょっと心配ですので、その辺の可視化というか、共有化をお願いできますでしょうか。

○事務局（庄子課長）
　はい。

○佐藤（翔）委員
　そうしますと、1「背景」と2「拠点の軸」の話というのは、前回の第4回の議論から抜き出してきたとすると、第1回から第3回の議論は、これに反映されていないということになるんでしょうか。

○事務局（庄子課長）
　1「背景」と2「拠点の軸」については、資料1「第4回検討委員会までの意見整理」で重複している部分を網掛けしつつ、新しく追加した部分を下線表示しており、第1回を初めとする全ての議論から抜き出してきております。

○佐藤（翔）委員
　なるほど。別に信用してないわけじゃないんですけれども、どういうプロセス、方針で作ったか少し心配なので、後日、対応関係などを整理いただけますと今までの積み重ねでこの資料ができていると我々も納得できると思います。これは要望ですので、ご検討いただければということです。

○事務局（庄子課長）
　ありがとうございます。

○野家委員長
　ありがとうございました。それでは、事務局で今のご質問にあったようなことを何か一覧表にでもして配付していただければありがたいと思います。
　ほかに何かご質問等ありましたら。よろしいでしょうか。
　それでは、きょうの主要な議題になりますが、資料3の論点に基づいて意見を交わしていきたいと思います。
　今回もホワイトボードを使って、皆様から出た意見を整理しながら議論を深めていきたいと思いますので、この部分のファシリテーターはこれまで同様、本江副委員長にお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。
　それで、これまでの4回の議論というのはなるべく論点を発展させる形で自由に議論いただきましたが、今回以降は時間的に報告書の取りまとめに向かわざるを得ないので、もちろん発展させていけない理由はないんですが、なるべくなら収束の方向というのを頭の片隅にちょっと置いていただいてご議論をいただければありがたいなと思います。
　それでは、本江副委員長、よろしくお願いします。

○本江副委員長

はい。今、委員長がおっしゃったように、いろいろな形で議論してきて、話を結構広くしてきていると思います。まとめちゃうと4つかということで、何か十分じゃない気もするけれども、でも大きくはこういう役割を果たすようなタイプの施設であろうということですね。言葉遣いはもうちょっといろいろあるかもしれません。

それで、きょうは折り返し地点で、もう少し具体化しよう、あるいはいろいろ言ってきた内容の精度を高めようというか、実際につくるとするとどういうことか、というのをもうちょっと具体的にしていきたい。その上で、前例としてどういうものに似ているのかとか、あるいはこれとはこう違うとか、なんらかのケーススタディーをしながら、我々の拠点の具体的なプログラムを考えたい。それで、どのように議論したらいいかということを事前に僕と相談をして、考えてみました。

先ほど、4 つ役割がありますよという整理がありました。それで、具体的にその拠点はどんなもので出来ていますかといったときに、こういう施設で、展示の機能があるだろうとか、広場があるんじゃないかとか、これも大きい小さい、いろいろあるんだけれども、モニュメントは何かあるだろうか、歌があるとか、メディアを使うよねとか、アーカイブがあるとか、何らかフューチャーセンターの機能が持つ要素があるんじゃないかとか、財源とか、粒度はいろいろあります。

これらが表になっていまして、これからやりたいことは、この表をみんなで埋めることです。例えば、広場が何かあるだろうと、そうするとそこは、この1番の多様な経験の共有・蓄積・発信するという役割を果たすときに、広場というのは具体的にどういうスペックのものであるといいのか。例えばサイズ感で言えば1万人ぐらいは来られないとねとか。あるいは屋内のほうがいいとかね。とりあえず広場ってすごく抽象的に言っているけれども、みんながイメージする広場っていっぱいあるんで、そのうちこの役割を果たすにはこういうスペックの広場だよねと、超長期の記憶のためにはこういうことがあるといいとか、それは単純に1つにならないかもしれませんが、この枠の中に、例えば広場なら広場のこういうスペックの広場だとそれぞれの役割を果たすことができるだろうということを書き込みたい。芝生でいいんじゃないのとか、ペイブ（舗装）になっているとか、すり鉢状になっているとか、屋根があったほうがいいとか、ちょっと建物っぽく言い過ぎかもしれないけれども、何かそういう役割を果たす。広域的な連携だったら交通の便がよくないといけないとか、何かそういう素朴なことも入ります。

この表が埋まると、例えば広場というのはこういう広場だといいねと。うまいこと入らないやつは、その他のところに、こういうスペックだといいというのは入れてもいいです、ナイター照明があるといいとか、そういうのが。

表が埋まってくると、多様な経験の共有・蓄積・発信のところは、こうつくられていくと、この機能は果たせるであろう。こうやって見て、でもこういうのもないとだめだねと、新しい要素の欠落に気がつくかもしれない。

歌と僕らは言っていますが、歌って言われても困る、みたいなところがちょっとあるじゃないですか。そのときに、超長期の記憶では、万葉集の歌なら、今でもみんな覚えているのがあるから、歌にはそういう機能があると。長過ぎるとだめだとか、歌ってこんなのだといいねというような話をやっていきたい。

1 時間半しかないのに、こんなでかい表が埋まるのかということがありますが、埋ま

れば、こういうスペックでこういうものの要素を集めるとこの４つの役割を果たす中心部メモリアル拠点ができるであろうという仕様書になるという構想であります。みなさんそんなにうまくいくかという顔をしていますけれども、それは皆さんがどれだけ上手に埋めてくれるか次第です。だから、新しいこういうのも要るよねと今思いついたというのがあれば、それは別にそんな整理になくてもよくて、漏れなくなくてもいいので言ってください。それで５番目の役割のことがちょっと入っていても構いません。

何か具体的なことが出なければそれはなくてもいいんじゃないかという話になっていくし、別にこの４つをきっちり埋めないといけないということはない。

歌は超長期にはすごく役立つけれども、余り具体的なことに役立たないとなったっていいんです。

それぞれの要素がどういうふうに働くのかということのイメージをもうちょっと具体化したい。具体化するとそれに似たものを探しにいったり、まだないということを確かめたり、誰とつくっていったらいいのかを考えたりするヒントにできるということであります。いろんなことあるといいねと言っていたのを少し具体化する、精度を高める折り返し地点にしたいというのが今日の狙いです。

事務局から皆さんのところに一応説明されているはずで、何となく考えてきてくださっていると思うんですが、ちょっと時間をとります。

イメージとしては、付箋に一言二言書いていただいて、この要素はこういうふうに働くということをいただきながら、何かもうちょっと具体的なイメージをしながら議論をしたいと思っております。質問がございますか。何すればいいかわかりますか。

○マリ委員

東北大学のマリです。すいません、もしかして私の想像力が弱いのかもしれないんですけれども、これから具体的なことを話そうという一方で、新しい建物が建つかどうかということはまだどっちでもいけるようなことが逆に、難しいですよね。

○本江副委員長

そう難しい。だから、もう１個言うとね、これが全部埋まるとすごいフルセットができちゃうと思います。そんなのがつくれるのかしら、みたいなことはあると思うのです。今のところ予算も全然決まってないし、少なくともあの土地を使おうみたいな目論見も全然ないと伺っています。なので、これを埋めて、これをつくりましょうと言っても、そんなものできるわけがないのかもしれないです。

なので、今日は２段階の議論があって、この表をできるだけ埋めて、具体的に言うとこういうようなもんだよねという話をする一方で、もう１つの議論として、全部じゃないとすると、どこに重きを置くか、どの役割・要素に力点を置くべきかということも伺いたい。例えばアーカイブと言っているのは、図書館も博物館もあるんだからそっちに任せれば良くて、もうちょっとシンボリックな活動にフォーカスしたような施設があれば、自然体の中では１つのやり方ですよねとか。例えばモニュメントとか象徴的な存在重視のあり方がありますよねとか。行事なんかいろんなところでやればいいのであって、やはり図書館の機能強化だけでは済まないのだから、例えばアーカイブ寄りのあり方としてフューチャーセンターとアーカイブを合体したやつ、メディアテークの防災特化型みたいなやつをつくって、イベントは国際センターも公園もいろいろあるんだからそっ

ちでやればいいじゃないかとか。

そのあたりのフルセットを新しくつくるのではなく、どこかに重きを置いたパターン、あり方の可能性を後半で議論し、幾つか言えればいいかなと思います。

その前に、我々の想像力で、少なくとも役割があってここで委員会をやっていますから、この表が全然埋まらないんだったら、フューチャーセンターと言ったけれども、それ全然イメージできないんだったらそれはつくられませんよということになるので、なるべく埋められればいいなと思っています。そんな感じでやりたいと思います。いいでしょうか、質問ありますか。

○大泉委員

大泉です。質問というか、意見というか、皆さんの意見も聞いてみたいなと思ったんですけれども、この間、一般の市民の方々もお集まりいただいたワークショップ形式での議論もしました。あの議事録を見せていただいたときに、多分複数の意見の方で「メモリアル拠点は要らないのではないか」という趣旨の発言が何個か散見されたんですね。そういう意見を持つ人もいるであろうというのは思うんですけれども、一方で、じゃ現状で我々が、この震災を経験した我々がこの議論をする上で、例えば多様な経験の共有とか蓄積とか新たな知恵の創造と社会への実装とかというものが、もう十分だと、今のまちを見渡しても成り立っているというんであれば、新しいメモリアル拠点なるものは中心部に要らないんじゃないという議論は成り立つんですけれども、まだ足りてないよねという現状に立てば、やはり我々が今から議論していく拠点はやはり必要なんだと、それがどれほどの規模でどれだけの財源のものかはこれからなんですけれども、でもやはり中心部に新たな拠点なるものが大なり小なり必要だという前提のもとに議論をしていきたいなと思うので、何かこう卓袱台をひっくり返すように「それ要らないよね」という結論が待っているというのではなくて、やはり今からの議論は、ちゃんと中心部に拠点を持とうと、持つんだったらこんなことがあり得るよねという議論なんだというのを確かめ合ってやりたいなと思っていました。

○本江副委員長

大泉さんのご意見は、最も根源的な話だと思いますが、今の件、いかがでしょうか。

余り先に司会が言っちゃいけないけれども、僕はおおむね同意で、前の検討委員会の案をつくったときに、中心部と両方要ると言った委員の 1 人としては、8 年たっているけれども、役割が必要だなとは思っています。委員長、どうでしょうか。

○野家委員長

今の大泉さんの意見に全く賛成です。確かに必要ないという意見もちらほらあったことはあったと思いますが、それほどほかを圧倒するような強い意見ではなかったような気がしますし、むしろいろんな意味で「必要だ」「つくるべきだ」という声のほうが大半を占めていたんじゃないかと思います。それとこれまで 4 回の我々の議論の中でも、メモリアル拠点が必要ないという意見はそれほど強い形で出てきたわけではないので、やはりその必要性は一応認めた上で、具体的に今一覧表にしていただき、これは要らないというのは当然あり得ると思います。アーカイブはほかのところに任せてもいいんじゃないかとか、あるいは展示は荒井のメモリアル交流館で間に合うんじゃないかとか、そ

ういう意見はあり得ると思いますけれども、全体としてやはり仙台市の中に何らかのメモリアル拠点が必要だということでは大体の合致というか、了解は得られているんじゃないかなと感じています。

○本江副委員長
　ありがとうございます。ということですが、今のところで、いいですかね。先ほどの話でもありますが、後半に、どこに力点を置くかという話をするときに、すごく小さいのがあるとするとこう、フルセットだったらこのぐらいというような、何かその辺で規模感も含めて話ができればいいかなとは思います。そんなことでよろしいでしょうか。
　まずは、ちょっと時間とります。少なくとも2つか3つ、ここはこういうことじゃないかなと、マスを埋めるように付箋に書いてください。ご説明もいただくので、書くのは一言でいいです。誰が貼ったかは記録がありますので、メモを書いていただいて。このエレメントがこの役割を果たすにはこういうことである必要があるんだというのを付箋に書いてください。
　最初は順番に貼ってもらいながら説明してもらって、2 周目ぐらいからはそれを受けて、ここが空欄のままだとまずいというところを埋めるとか、そういうふうに進めていければと思います。4 分待ちます。15 時 40 分になったらマリさんから時計回りに聞きます。

（各委員が自身の意見を付箋に書く時間を4分間とる）

○本江副委員長
　人ごとに聞いていきます。1周目はそういうふうにさせてください。
　ブレストですから、関連する意見が出て、同じようなことを考えました、あるいはそれと対になることでこういうのがありますというのがあれば、順番でなくてもそのタイミングで割り込んでいただいても大丈夫です。幾つかは書けましたね。じゃマリさんから。

○マリ委員
　最初、一番絶対外したくないということで、「③展示」の「(4) 広域連携」に入るかな、3.11の全体的な説明が必要だと思います。仙台市は荒浜がありますけれども、私個人的にはどう見ても、新しい展示が必要。

○本江副委員長
　仙台市だけのことじゃなくてということですね。

○マリ委員
　はい、福島のことを含めて全体のこと。
　もう1つは防災を学ぶこと、学ぶ場所の施設が必要だなと思いました。

○本江副委員長
　これは施設のところ？

○マリ委員
　はい。

○本江副委員長
　学べる機能がある、その施設の中でね。

○マリ委員
　私のイメージは施設の中なんですけれども。

○本江副委員長
　そういうスクールみたいなのができる。ここかな、社会実装。

○マリ委員
　そうですね。

○本江副委員長
　これは後でまた動かしてもいい。今度はどこでしょうか。「だったらさ」みたいなことがありますか。

○佐藤（翔）委員
　「だったらさ」シリーズで。それが施設なのか人材育成なのかわからないんですけれども、一応人材育成側に入れていただいて。
　今回の台風19号で吉田川が決壊した大郷は亡くなった方はいないんですね。今フィールド調査をやっているんですけれども、彼らは堤防が切れる前提で暮らしていたんですよ。切れると思って暮らしていた。そういう意味ではリスクを過大評価しておくことって大事かなと思って、人材育成のリスク教育と書いて括弧して（今まで培ってきた災害文化）と、1つがそれだろうってことでそこに入れました。

○本江副委員長
　なるほど、ありがとうございます。そこで勤めている人という視点もあるし、この拠点が機能として、人々というか、市民のリスク教育を行うという意味と、両方ありますが、そこはどっちでもあるね。ありがとうございます。

○志賀委員
　象徴的存在のところにモニュメント、音、行事、歌とありますが、全てにかかわることなので上にお願いします。

○本江副委員長
　そうですね、上位のところに置きましょうか。

○志賀委員

そこに「身体とともに」ということを付け加えてください。というのは、何か1つの像を立てればいいという話ではないので。その中で「音」というのがありますが、これは例えですが、時を知らせる、これは毎日2時46分に地震が起きた事を知らせる。これは公的な場を想像しますが、そうなると公的な場所は一体どういう場所か、どうしてか、という議論が必要になってくると思います。そういうふうにして時間というのを身体化していくことで、例えば、まだ震災の記憶を持たない小さな子にも、日々のことにしていくようなことで、これは割と「(1) 多様な経験の共有・蓄積・発信」から「(4) 広域的な連携」の全てに言えるのではないかなと。

○本江副委員長
あえて言うと「(3) 超長期の記憶の継承」のところかな、象徴というところですかね。

○志賀委員
そうですね、はい。

○本江副委員長
新しい子に「これ何」と聞かれたら「それはね・・・」と説明し始められるというようなこと。

○志賀委員
はい。それで、「⑥モニュメント」のところですけれども、例えばアゴラ（広場）的な、一見その場に立ち入っても何もないというような場であっても、その足元を見ると地面に何か刻まれているような、そこに来る人が自分の手を加えて刻んでも良いし、そうするとその場所自体が変化していくことにもなるし、誰しもがそこに立ち止まって、自分が生きてここにいたということを少しでも記していける、つまりは誰もがメッセージを残せるというようなことも、いいのかなと思います。
なので、何かわかりやすい像とかということではなくて。世界のあちこちを見れば、自然発生しているところがたくさんありますよね。何となく人が始めたことが何か大きな記憶につながったりもしている事象も結構あります。
なので、そういうことを考えていくと、「⑨歌」は、とりあえず今は考えなくてもいいんじゃないかなという感じもあります。なぜかというと、そこにおいて誰しもが自分の思う歌を歌うであろうからです。それが時に故人の好きな歌であったり、歌われる歌は様々かもしれませんので。

○本江副委員長
なるほど。何かそういう震災の歌みたいなのをつくってみんなで歌うみたいなことではないんだと。

○志賀委員
そうではない、もっと抽象度の高いことだと思います。とりあえず次に回します。

○本江副委員長

ありがとうございます。今すぐつくっていくというよりは、好きな歌をそれぞれで歌うような中で生まれてくるみたいな。

○志賀委員
はい。あと「⑦音」の一番下のところで、公的なものというのはどういうことかという学びが必要になってくるので、これは全てにおいて言えることだと思うんですけれども、それが今、日本において、この宮城において、仙台において、公的なものとは、どういうものであるかという「学び」が必要だと思います。人々がどのように公的なものを捉えるかは、変化し続けているし、そのために、「人材」のところには、今すぐにでも、この拠点をどうするかという議論とともに、公的なものについての、公共的なもの、公のもの、パブリック・・からのインディペンデント性、そこから近いようで遠い「プライベート、プライバシー」などの問題に関する学びの場を始めないといけないような気がします。それは歴史の中でどう議論されてきたかを学ぶことでもあるので、色々なことが関わってくると思いますが、そこを、拠点に関わる方達と最初から学びなおすような、スタディセンターを兼ねるような、わからないですけれども、勉強会のような事をやっていかないとだめだという気がします。

○本江副委員長
それは、ここの全部に共通して貼るのは簡単なんだけれども、どうだろう、4 つの役割のどれかという感じになりますか。組織のほう。人のほうがいい。

○志賀委員
そうですね。というのは、人材はとにかく第一優先。

○本江副委員長
それは力点のところでもあるね。このことを言ったときに組織とあるのは、ここでこういう組織をつくって運営させるというか、それは市役所直営なのかみたいなこととか、運営形態みたいなイメージがこの表の整理の中だとあるけれども、機能としての教育機能というか、学習機能というか。

○志賀委員
教育とも言えるのだとは思いますが、誰かが一方的に短期間教えて終了にせず、持続的な勉強会のような、こういうことがあって、こういう歴史があって、今こういうことが議論されていて、こういうことが問題になっているということをどうやったら学び合えるか、議論につながるか。というのは、いわゆる世間で言う大きな議論がこの仙台の拠点についての議論にまんま当てはまるわけではないし、ここの拠点の問題に関しての議論になっていかなきゃいけないので、それは誰か講師の人に来てもらって一方に教わるということだと、ちょっと不十分。試行錯誤を共にできたらいいのかなあと思います。

○本江副委員長
わかりました。新たな知恵の創造と社会への実装みたいなところに、さっき佐藤先生が言われたようなところにこういうことも、何というのか、プログラムの中身としてや

るんだということでいい？ちょっと違う。

○志賀委員
　とりあえず。

○本江副委員長
　とりあえず、ここで厳密にやらなきゃいけないということでもないので、いろいろ限界があることは仕方ない。またいろいろおっしゃってください。

○佐藤（泰）委員
　資料を見ていて、まずこれをどう継続させていくのか、どう発展させていくのかということがやはりすごく重要だと思うので、そのためにはどうすればいいかなということがちょっと、それは現実的なやり方、方法論とかということも含めて考えていく必要があるんだろうなと思っていたんですね。ただ、この表に沿ってどういうふうにそれを言語化できるかといったらなかなか自分の中でも整理がつかなくて、今お二人のせっかくのお話もほとんど聞けずに、一生懸命何だっけって考えながら片っ端からメモしていたんです。とりあえず、どこに入るかよくわかりませんが、とにかく手元にとってある一番手前から。
　常設展示をやるなら、あくまで観光とか教育とかっていう目的の範囲でやるんだろうと。何か常設的な展示が必要だということが本当にあるとすれば、その教育的な意味とか観光客向けのということだと思うので、それを越えない範囲でというか、またはそれを越えないというのはどの程度かというのもありますけれども、そこは何かちょっと絞って展示については考えていったほうがいろいろ広がり過ぎなくていいんだろうなということ。基本的には企画展とか何かをやっていったほうが展示をやるんだったらいいと思うんだけれども、常設が必要だとすれば、例えばそんな目的はあり得るだろうということです。
　あと全然違いますけれども、ミッションの公共性を維持するための強力な組織が必要じゃないかとか。

○本江副委員長
　強力な組織の「強力」ってどういうことですか。

○佐藤（泰）委員
　例えば公共性を担保する委員会みたいな場での議論の結果が、社会的なバックボーンとしてしっかりと受け入れられるような強力なものでなければいけなくて、役所が勝手にやっているとか何か誰かが勝手にやっているみたいだけれども、うちはよくわかんないしみたいな組織だったら意味がない。ここで議論されている様々な事業を続けていく上で、そのミッションがみんなに共有されつつ、きちっと責任を持って実行されるような強力な組織というのを何とか構築する必要があるんじゃないかということですね。
　その組織は、施設があるなしにかかわらず、そのミッションを遂行することが何よりも大切にし、施設に縛られない継続的な組織である。
　施設に縛られると、施設運営のために労力を使い切る可能性が大きいので、それより

大事なことがある組織にしたいということですね。運営のための組織であれば、施設がなくなると活動が終わるとか、そういう問題では本来ないはずなので、そこは逆転しておきたいなと、ミッションを遂行する組織あっての施設であるというものでありたいと。

それから、多様な財源の確保が必要。施設の入館料っていうのは基本しょぼいと言ったら悪いけど、それで何かの足しになるということはあまり考えられないので、そうじゃないお金を生み出す仕組みを持つような、それはメモリアルという枠組みだけではない何かを巻き込むとか、それとつながっていくとかっていうことも含めたことを考える必要もあるかもしれない、財源を確保していく上ではそういうことも必要かなということかと。

○本江副委員長

「多様な」とあるのは、税だけじゃない、仙台市の公金だけじゃないというニュアンスがありますね。

○佐藤（泰）委員

そうですね。公費だけだと絶対限界があると思います。それを支えるミッションがあって、そのミッションを支える公的なバックボーン、社会的なバックボーンが必要なんだと思います。

あと多様な主体の参画という言葉が使われるんですけれども、参画というと何かそれこそ拠点があってそこにみんな参画するというイメージだけれども、そうじゃなくて、この事業はそもそも多様な活動の集まりであるべきじゃないかと。誰かが中心になってというよりは、いろんな人たちがそれぞれにやっていて、それぞれの主体性があって、それが集まってのことでなければいけなくて、だから物の言い方で、参画というと何かいろんな人が参加しているようなイメージがあるけれども、それとは違う、もうちょっと一段先の状態をつくらなければいけないんじゃないかなと。

○本江副委員長

多様な主体が呼ばれて参画というだけじゃないよというのは、もちろん(1)にかかわるよということでもあるけれども。

○佐藤（泰）委員

そうです。主体がそれぞれありつつ、そういうものの集まりとしてこの事業が進んでいくということであれたらいいなということですかね。

拠点というならその拠点に人々はいったい何を求めるのかということをちゃんと考えなければいけない。もちろんそのことがこれまでずっと議論されてきて、それが空間であるとか象徴性であるとかということになっているんだけれども、実際にそれが人々の求めていたことにちゃんと応えているかということは忘れられがち。最初がこうだったからただ続ければいいということではなく、求められていることに応えているかということが常に検証されたり更新されるようなことが必要なんだろうなと。それがミッションを支えているということにもなると思うんですけれども。

○本江副委員長

拠点に求めることに応える。

○佐藤（泰）委員
あと全然レベルが違いますが、人の関係のこと。ネットワークとかアーカイブとかアートとか協働とかお金とか資金とかのプロが関わらないとだめだと。誰でもいいからこの仕事をやってと言われてできることではなくて、アートの専門家であったりアーカイブの専門家であったりというプロフェッショナルの人たちが、参画ではなく主体的に関わってやる状態が必要だと。
あとレベルがまたちょっと違うんですが、地域の市民センターの活用。市の中心部の拠点とかって話もありつつ、一方でやはりこの震災の記憶って地域ごとの記憶でもあるわけで、それを地域から引っ剥がして真ん中に集めてくると命がなくなるというか、やはりその場その場なりの記憶が生きる状態というのがあるので、それはその地域にやってもらうというか、それをやってもらうのをある意味お手伝いするなり支援するなり支えるなりというようなことが必要なんじゃないかなと。
あとモニュメントですかね。あり得ないものを可視化する。モニュメントって何だろうといったときに、震災ってあり得ないことが起きたじゃないですか。あり得ないことが現実になるということを思い出すために、何かあり得ない形とか、「えっ何これ」みたいな、そういうものが何かシンボルとして、何か塔みたいなのがあって、そこに向かって手を合わせるとかっていうのもいいかもしれないけれども、そうじゃなくて、この出来事のことを何かこんな大きな何か信じられないことがあってということの何かシンボルみたいなものとしてあったらいいかなと。以上です。

○本江副委員長
そうであることによって何か長もちさせたいという感じかな。

○佐藤（泰）委員
そうです。

○本江副委員長
この辺のすごく具体的なことというよりは、そういうあり得なさを表象するということですね。あり得ないものにすると言うのは簡単だけれども、どうするんでしょう。
何とかこの表に入れようと思っているけれども、のっけから欄外にいっぱい貼っている。全体に効いてくるということであれば、それは欄外ですので、それはそれでもちろん構わないです。

○佐藤（翔）委員
さっき志賀さんが「歌、微妙ですね」とおっしゃったんですけれども、結構迷っていて、歌は歌で残っているものもあるといえばあるんです。インドネシアの「スモン」という歌と、神戸の「しあわせ運べるように」という歌があって、「しあわせ運べるように」はまだ20年ちょっとしかたってないんですけれども、インドネシアの「スモン」のほうは実際それで命を救われている方もいるんですね、それ自体が教訓のことにつながっていて。一応そのケーススタディーがあるということなんで、ケーススタディーの候補と

してそこには貼っておきます。

○本江副委員長
　長もちするということですかね。

○佐藤（翔）委員
　そうですね。あと、「⑬人材育成」の「(2) 新たな知恵の創造と社会への実装」で、さっきはリスク教育と言ったんですけれども、もとから私、災害に強い人って生きる力が強いと申し上げているので、その教育をということですね。
　あと人材育成シリーズで言うと、今、広島へ頻繁に通っているんですけれども、広島って被爆体験していない人も実は証言を行うということをしています。そういう未経験者が語れるような、話せるような人材も育成したほうがいいだろうということですね。
　今度、さっき佐藤さんがおっしゃった、真ん中の拠点に寄せ過ぎるとその魂が抜けちゃうみたいな話があったんですが、私もそれ賛成で、「⑥モニュメント」のところになるんですけれども、やはりモニュメントは各地域にあるべきだろうと思っています。しかも今、震災とかいろいろな災害の被災地で有効に機能しているのは住民が定期的にメンテとしてかかわっているところが残っていると、何か供物を行うとか、あと掃除するとか。今度、大船渡でやっているのは、木でやって、腐る前提で更新しますみたいなことなので、そのメンテを必ずするようなものですね、各地域ばらばらと。
　あと、「⑪アーカイブ」のところなんですけれども、これ私は反省しているんですが、アーカイブって私は勘違いしていて、何でもかんでも集めまくるものだと思っていたんですけれども、実はそういうものは残らないんだということがこの８年でやっと自覚するようになりまして、やはり意味のあるものを１個１個丁寧にストーリーみたいなものとして残さないと残らないんだと思うようになったので、「(2)新たな知恵の創造と社会への実装」かなとか思っているんですけれども、物語を再構築する場が必要だなと思います。
　最後はちょっと、これは拠点じゃないだろうみたいなところなんですけれども、やはり何か大会とか事例共有の場って必要だなと思っていて、地域で実際に活動しようとなると、こういうお手本があるんだって知る場が絶対必要だと思うんですね。そういった意味で、やはり競争原理なり事例共有の仕組みとか行事が必要かなと思って、「(3) 超長期の記憶の継承」なのか、「(1) 多様な経験の共有・蓄積・発信」なのかみたいな感じのところですけれども。以上です。

○本江副委員長
　行事って別に追悼式典だけじゃない、活動の共有の場みたいなのもありますね。

○大泉委員
　私も早目に。語り部の話を聞ける空間はやはり施設だろうなと思います。

○本江副委員長
　共有、発信かな。

○大泉委員

はい。そのためには人材ですけれども、もう既にやられていますが、語り部の発掘とか連携とか、今、翔輔先生が言った、経験していない人をも含めて。何か埋めなきゃいけないので、できるだけシンプルな答えを。

あとは、今の行事も一緒で、共助の先進例を学べる、一人一人が備蓄したりとか何か防災を学んだりもいいんですけれども、共助の大切さをこの間は知ったので、ここをこうやって頑張っているというのを検証したりするのもありだろうなと。

これちょっと安っぽいんですけれども、被災体験をビジュアル的に追体験できるというわかりやすさはこだわりたいところで、危ういっちゃ危ういんですけれども、それってやはり修学旅行とか企業研修とか町内会の視察とか、そういうニーズがないと、この拠点なるものをつくっても、誰の費用、財源で賄うんですかとなったときの、毎回チャリンチャリンというのを積み重ねって大事だと思うので、入館料というようなものもないと、何か財政が、行政が金なくなったときに最も先に切られる施設みたくなっちゃうのも嫌だなと思うので、要するに人さえ集めればディズニーランドは自立できるんですよね、みたいなところと同じように、やはりここも自立したいので、観光客を取り込めるというとちょっと何か下世話な、下世話というか、下品なんですけれども、戦略としてはちゃんとやっておかないといけないかなと思います。

○本江副委員長

「⑮財源」のところに入りますか。

○大泉委員

「⑮財源」に近いですかね。

それから、「(14) 広域的な連携」と「⑮財源」のシンクロで、やはり今もう既に仙台で中心部に何かやろうとしているという発信をし続けておくことが、いざ何かができたりしたときに、乗っかれるとか協力したりとかそういう人たちとの関係性が多分この中心部のメモリアルの価値を結構決めるので、慌てて何かでき上がってから PR するんじゃなくて、早目に手を挙げて、仙台はそういうのを担うんだというメッセージを早目に出しておいたほうが、いろんなところと組んだりとか、ここの価値を上げられると思いました。

それから、「⑥モニュメント」に近いと思いますが、やはり手を合わせるとか慰霊をするというものがあり、「(1) 多様な経験の共有・蓄積・発信」としてあったほうがいいと思います。

○本江副委員長

手を合わせられる。

○大泉委員

はい。何かそこじゃないだろうという感じもするけれども、何かそういうよりどころがないと困るんじゃないかなという気もします、訪れた人がというか。以上です。

○本江副委員長

はい、ありがとうございます。じゃ遠藤さん。

○遠藤委員
研究機能、実践者と専門家の研究機能が定期的に発表の機会がある。それで、「事業」というものがないなと思って、項目として事業が必要なんじゃないかなと。今は伝える手段が展示しかないですよね。アーカイブは保存なので展示とつながりますけれども、そこに事業がないなと思って。

○本江副委員長
事業ってプロジェクトをやるという意味の事業ね。

○遠藤委員
そうですね。プロジェクトをやったり、学ぶ機会をつくるというのも事業ですし。あとは「⑪アーカイブ」について、仙台の中心部に集めようとしないということが大事じゃないかと。やはり、あるべきところにあることでその意味がある。なので、あるべきところをきちんと知ったり連携がとれているというのが。

○本江副委員長
ナビゲーションとインデックスがあればよくて。

○遠藤委員
そうですね、あと借りるとか。
あと「⑥モニュメント」については、自然とか地球とか景観なども配慮したものもつくっていただけるといいんじゃないかと。

○本江副委員長
なぜそうだといいと思いますか。

○遠藤委員
地震というそのものの性質を考えた上で、地震とか地球とかですね、どんどん今の社会は切り離されているので。
あとは「⑮財源」と「(3) 超長期の記憶の継承」あたりで、例えば条例をつくったら長期でやれるのかとか、そういう担当課をどうするかとか、継続のためにはどんな仕組みが必要なのかもしっかり考える必要があるんじゃないかと。

○本江副委員長
発明が要るかもしれませんね。

○遠藤委員
「⑬人材」のところで、伝える人と学ぶ人、あと学ぶ仕組みのところが必要だということ。

○本江副委員長
　それは共有のため。余りきれいにいかないんだけどね。上でいいかな。

○遠藤委員
　あと、さっき事業を加えたほうがいいんじゃないかといったところに、既にある団体や個人や、さっきの語り部さんとの連携ということですね。

○本江副委員長
　こういうことをする、この横が事業かもね。

○遠藤委員
　あと「(4) 広域的な連携」で、もう既に幾つものいろんなネットワークがあるので、何かそれにかぶるようなものではなく、かえってそっちを利用させてもらうようなこともやったほうがいいんじゃないかということと、あと運営組織は柔軟で社会変化に合わせることができる運営組織が必要でしょうと。かなり時代のいろんな速度も速いですし、でも守り続けなくちゃいけないものもあるから、ばっさり切るとかそういうことでいいのかどうかとか、かなりいろんな判断が迫られると思うので。
　「⑫フューチャーセンター」は、「②施設」の中に入っていくんではないかと。こちらの文章のところで課題解決の拠点と書いてあるんですけれども、そこにちょっとつけ加えて、課題解決だけじゃなくて、やはり未来創造とか未来探究みたいなことも入れていただいて、どっちかというとフューチャーセンターってまだなじみが余りないので、どちらかというとその後に括弧してフューチャーセンターぐらいのほうがいいんではないかということですね。

○本江副委員長
　新たな知恵の創造と社会実装みたいなことが大きくは役割になっているから、これはそのままか。

○遠藤委員
　そうですね。あとこれは確認なんですけれども、今まで中心部拠点という話をしてきて、委員会で余り施設という言葉を使ってなかったと思うんですね。施設という言葉のイメージとしては、1 つの単独の建物というイメージなので、ちょっと施設という表現はこの委員会としては避けたほうがいいんじゃないかと。拠点のあり方として、施設もあればどこかの施設の中に入るという、フロア借りにするという方法もあるので、施設と聞くと何か建物を建てると決まったかのようなので、ちょっと言葉の選び方に注意したいなと。
　拠点は必要ってことですよね。ただ、施設なのか、場所、一部の場所なのかというのはまだ決めてない、候補も出ていないですよね。

○本江副委員長
　分散的なものであるとか既存のものを使うとか、新しくつくろうとかということは、この中で、議論で出てくるかなと思います。

○遠藤委員

「④広場」なんですけれども、私のイメージだと今までの議論の中で皆さんの大きい意味のイメージとしては開かれた場ということが何か皆さんここの場での共通で、いわゆる公園のような場所をつくるということではなかったんじゃないかな。だから、広場って出ていると何か草が生えて、わからないですけれども、何かそういう場所がもうあるとなると、何かちょっとだんだん、何ですかね、限定されてきちゃうんですね。だから、広場という項目は要らないんじゃないかというか、開かれた場ということをまとめの中でも重視しているので。

○本江副委員長

物理的な狭い意味での広場ではなく、抽象的な意味じゃないかと。

○遠藤委員

はい。物理的な公園のような場所ではないという理解です。以上です。

○本江副委員長

わかりました。ありがとうございます。

○植田委員

これが「④広場」のセットなんですけれども、私、前回欠席したんですけれども、ポーランドのほうに行っていまして、それでアウシュビッツとかクラクフとかのほうに行ってきて、いろいろ何かたくさんヒントをもらったんですけれども、クラクフのゲットーがあった場所に何か広場があるんですけれども、そこに空白の椅子が真ん中に何個か置いてあるような空間があって、そこの広場というのは別に広くて何でもできるんですけれども、でも何かそういうことがあった場所だというのを喚起させる、だけど日常は邪魔しないような空間になっていたんですね。何かそんなふうに広場を使うというか、そういうモニュメントもあるんだなと思わされたというところがあったんですね。

ちょっとその延長で、同じクラクフで、ヨーロッパってすごく広場があって時計台があってみたいな空間があるんですけれども、そこで時報を鳴らしていたんですよね。その時報というのが、人がトランペットを吹くんですよ。それはナチスドイツと関係なくて、モンゴルが攻めてきたときに、トランペットを吹いて知らせてくれた人が矢に打たれて死んだそうなんですけれども、その人を讃えてその時刻にトランペットを吹くというのがあって、観光客はそれを聞きに行くんですね。観光客に手を振って、すごく高いところからトランペットを吹くんですけれども、吹き終わったらみんな散っていくということになっていたんです。

つまり、短いフレーズでもいいから2時46分に鳴らすということを繰り返して、そしてまた3月11日の2時46分に鳴らすということをやるのも何か一つ、音ということですごく考えさせられたことだったんです。それで大事なのは、人が吹くということじゃないかなと思って、人が吹くから、代替わりもあって、次の人がまたそれを吹いて継いでいくということが、身体を使ってリレーされていくということが大事かなというのがあって、仙台の新幹線の音とかだとどんなジングルかみんなわかると思うんですけれど

も、私が働いていた大学だと学生が校歌を歌えないんですよね。前の大学でもそうだったんですけれども、歌をつくってもなかなか歌える場というのがない、鳴る場所がないとだめだなと思って、生の音が響わたる空間が仙台市にあるかわからないんですけれども、それに同意してくれるような組織とか学校とかだけでも、時報的に鳴らすということも一つの記憶の継承の仕方としてあるなと思わされました。

○本江副委員長
　このブルー・プラークの話は。

○植田委員
　それは空間であり、それもモニュメントと空間ですかね。

○本江副委員長
　ブルー・プラークってそもそもどういうもんですか。

○植田委員
　ブルー・プラークというのは、夏目漱石とかロンドンで有名な人がここに住んでいましたみたいなブルーの統一されたデザインのものが飾ってあるんですよね。そんな感じで、ここでこんなことがあったというプラークが、ポーランドのあちこちにかかってあったんですね。ここに老人が集められて殺されましたということも書いてあるんですけれども、どんなふうに助け合ったかということも書いてあって、それはここで起こりましたというふうなプレートになっていて、さっきどなたか、佐藤先生かな、おっしゃったんですけれども、腐るものというか、木でそういうものをつくって、ブルー・プラークみたいに１回つくったら終わりじゃなくて、それを更新していくというか、うちにもこんなエピソードあったんだみたいな、何かそういうものが定期的につくり変えられていって、それをつくるときにどのストーリーを掲げるかということを、例えば学校にやらせるとか近所のそこの地域の人にやらせるとか、そういうふうにすると、ずっと更新するということ自体も教育というか、学びの機能にもなっていくし、アーカイブにもなっていくのかなということをちょっと考えさせられたんですけれども。

○本江副委員長
　これを更新してつくり続けることで。

○植田委員
　そうです。仙台市のあちこちに。

○本江副委員長
　あちこちに新しいのもできたとかみたいなことが入ってくる。ありがとうございます。

○野家委員長
　こちら側からいくと、まず「②施設」なんですけれども、前にも言ったとおりで、単なる箱物をつくって一丁上がりでは困るというか、ストックではなくてフローをつくり

出す場が必要で、その意味で僕は施設より「④広場」ということを重視したいと思っています。広場というのは要するにいろんなイベントが開催できる場所、だからやはりそれなりの面積が、例えば毎月11日には「のみの市」が立つとか、あるいはお花見ができたり、芋煮会ができたり、普段は寝転がったり、ランチを食べたりできるような、そういった人が行き来できるような場、それが広場で、その意味では建物よりは広場のほうが大事だと。前に志賀さんでしたっけ、屋根があればいいというふうにおっしゃっていた。だから、屋根が必要なときはテントを持ってきたりいろんなことができる空間、人の行き来、人のフローができる広場がこの拠点として大事かなと。

それから、「⑥モニュメント」に関して、さっき大泉さんが言ったように、よりしろというか、祈りの場をつくっておく。まだ2,500人も行方不明の人がいるわけですから。実例としては沖縄の平和の礎とか、あと広島のあれですね。僕は長崎のあの像は最悪だと思うんですけれども、僕がイメージしているモニュメントというのは、わかりやすい像でなくて、年輪みたいに1年ごとに増えていくというか、だから固定したあれではなくて、つまり何年たったかということが目に見えるような形で、年輪のように1年ごとにふえていくようなモニュメントがふさわしいかなと思っています。

○本江副委員長

手を加えて刻むみたいなこと。

○野家委員長

それもいいですね。

それから、「⑪アーカイブ」なんですが、この拠点に全部まとめるということは不可能に近いので、やはり役割分担が必要。今仙台市でも貝ヶ森の廃校を公文書館にするわけで、例えば震災復興のときの市議会や県議会の議事録とか公文書はそっちにまとめたり、映像はメディアテークに任せるとか。あるいは、散逸しやすい一次資料、当日の新聞とかそれだけを集めるとか、何か役割をきちんと限定したほうがいいだろうなと思いました。

それから、やはり今回の台風の被害もそうですけれども、フューチャーセンターは、新しい災害への想像力を育むようなセンターであって、今国連ではSDGsという持続可能な目標ということが言われていて、学術会議を中心にフューチャーアースというプロジェクトが今進んでいますが、台風、大雨、河川の氾濫ということも含めて、その辺と連携できるような、まさにフューチャーセンターであってほしいと思います。

それから、人材の育成は大変重要なんですが、例えば展示をするにしても、キュレーターがどういう形で役割を果たすかということが非常に重要だし、アーカイブの場合にはやはり専門家というか、アーキビストが必要ですので、施設はでき上がったけれども、そこに市役所の順送り人事で人が派遣されるようなことはやってほしくないということです。

○本江副委員長

さっきの「プロじゃなきゃだめ」と言っていたことと関連があるかと思います。

もう結構いい時間になってしまいましたね。僕も幾つか。ワークショップとか、国際会議はセンターがありますので、フューチャーセンターには、災害に係るいろんな活動

をつくれるアトリエとかガレージみたいなスペースがあってやるのがいいかなと思いました。

それから、同じようにこのフューチャーセンターは、いろんな人の持ち込み企画もするし、自主企画としていろんな企画を自前で生み出せるようにすると。市民センターと近いね。

それから、すごく素朴なことですけれども、ちゃんと遠隔の会議とかができる仕組みを持つ、それは緊急時にある役割を果たせるとかということもあるかなと思っていました。それで、みんなが関わるので、何か友の会みたいなのがあって、市民がいろいろ参加できる仕組みにするということなんだけれども、そういうものを持つとみんなが来やすくなるかなというようなこと、格調高いのがいっぱい出てくると思い言ってみました。

それから、台風の大きい被害があったみたいなこともあるんだけれども、だんだん、ザ・被災地といったときに3.11のことを指さなくなってきていて、今被災地というと吉田川とか千曲川とかのことになっていて、いつまでも東日本大震災の被災地がザ・被災地みたいな顔をし続けられなくて、来たる次の災害みたいなことにどう関わるかというのが結構大事。だから震災の経験を共有するだけじゃなくて、フューチャーセンターが持つ創造と探究みたいなことで、新しい災害に対応するとか、ザ・震災を超えて文化をつくるというようなことを自主企画でやることが大事かなと思いました。

ということで、残り30分です。今一通り伺いました。だったらこれもというのがありましたら是非。じゃ志賀さん。

○志賀委員

「⑪アーカイブ」のところで、これは先ほどおっしゃられたキュレーターとアーキビストが何を選ぶかですけれども、おびただしい数の震災に関する本が出版されていて、図書館に行ってその棚を見ても結構迷子になっちゃうというか、圧倒されて終わるから、そこでキュレーターやアーキビストの人たちが、「この場合はこれ」と、話せた上で選定されたりとか。それと同時に、例えば英語とか、ほかの言語でしかなくて日本語でないものの事例を知りたい場合の翻訳、それは日本語からも日本語に変えるというのも含めて、そのときだけの翻訳というよりは、そういうことに特化した翻訳も、キュレーターやアーキビストとともにあると思います。言い方変かもしれないですけれども、編集部のような機能があれば、先ほどおっしゃられた語り部の人たちが発話する場もしくは語る人を発掘するという場所も担えるのではないかなと思っています。

○本江副委員長

メディアのところで、ちょっと違うか、アーカイブ。

○志賀委員

そこからつながることなんですけれども、「③展示」のところで、今回の台風のこともそうですけれども、常に現在進行形であらゆる災害が起こり続けているということをタイムラインのようなものが見えるといい。例えば原発の例で言うとまだ廃炉もしていないし、状況が今どういう状況なのかということをその点から知れるとか、その先には当然チェルノブイリもあって、みたいな。もっと言うと、もっと歴史的なことも含めて、なぜその原発が始まったか、みたいな深い歴史にもつながるようなものが可視化できる

と、どの辺がグレーゾーンで、どの辺が明らかではなくてみたいなことが見える。点でしかわからないことをタイムラインで、しかも今１分１秒、歴史の時間が増えていっているということを見られるような、体験できるようなものがあるといいのではないかと思います。

○本江副委員長
　それはけっこう本格的な災害ミュージアムという感じ。

○志賀委員
　それをユニークな形にするということです。

○本江副委員長
　ありがとうございます。ほかはどうでしょうか、新しいのがあれば、追加的な。

○マリ委員
　すごく単純なことなんですけれども、佐藤さんがミッションのことを、私もミッションをはっきりしないといけないと。役割分担の関係もありますけれども、多分全部やることが難しいから、どういう視点でいこうということで、あと言葉が、先ほど歴史の話とか、歴史と文化とかという言葉に、ちょっとまた別な付箋になりますけれども、それは展示に入れてもいいし、あと住民の声と人間のにおいということが、展示でもミッションと一緒に、どういう施設。最近余り人間のにおいしない人もあり得るから、それは展示でもミッションでも一緒、どっちでも入れると思います。視点としては、これは住民の声を感じる展示。あと最近、沿岸部に第二語り部ということで、自分で経験してなくても、先ほど同じ話が出ましたんですけれども、多分第二語り部ということに、継続的に語ることができるような仕組み、多分「⑬人材」かな。

○本江副委員長
　「⑬人材」か、語り部はそうですね。発掘と連携、第二語り部。長期の記憶、第二、第三ですよね、直接じゃない人。

○マリ委員
　そうです、はい。

○遠藤委員
　施設のところなんですけれども、メモリアル関連の活動、被災地の活動をされている方は、メディアテーク、サポセン、メモ館、市民センターと結構市内の施設を何カ所も使っているわけですね。だから、施設の再統合じゃないですけれども、そこで必要とされている機能も、ある意味フューチャーセンター的な機能が求められているんですけれども、更新してないんですよね。だから、何かそこの統廃合とか再配置とか合体とか、そういったことも含めて何か考えられるといいのかなと思いました。

○本江副委員長

なるほど、これを機にね。市の市有の施設の統合の機会と考えることができるのではないかと。どうでしょうか、大泉さん、新しいのありますか。

○大泉委員

相似併立の空間であり施設であり立地問題なんですけれども、やはり２つ気にしなくちゃいけないと思って、中心部のメモリアルがどんな内容のものであれ、やはり一人も誰も来ないとか、つくったはいいけれども誰も訪れないというのが最も避けたい結論。逆に言うと理想は多くの人が来てくれる、そこで何かを感じてくれるだと思うんですけれども、そういう意味ではやはり集客力というか、人を集める力がなくちゃいけないので、アクセスとか駐車場とかそういうところは目配り大事で、すごいいいんだけれども、あそこは行きづらいよねとか車停められないよねとか、修学旅行生のバスが行けないよねみたいなのは何か独りよがりになりかねないので、そうならないための細かなケアは大事だと。

一方で、もしかすると、例えばディズニーランドですけれども、立地は悪くても何かすごい力があるから人が来るとか、でも例えば都心部にあったほうが人がついでに寄るからいいとか、どっちか、仙台で言えば中心部の円をどう描くかですけれども、本当に例えば仙台駅から徒歩圏がいいのか、それとも、そこって駐車場確保とか面倒くさいよねとなると、多少徒歩圏からは外れるけれども圧倒的な集客力を持つとか、何かその辺の、財源とかにもよりけりですけれども、そういうところをやはり人がちゃんと来やすい立地は大事だろうなと思います。

○本江副委員長

そうですね。ほか、どんなスペックが必要か。

○植田委員

ちょっと何かすごく抽象的なんですけれども、このミッションというのを考えたときに、どれだけ日常の中に、それこそ災害文化というか、記憶とかを自分のこととして引き継いでいけるのかというところだと思うんですよね。だから、日常の中で自分が今やっていることは、いざ災害が起こったときに被害を大きくしたりものすごく悪化させたりすることじゃないかなと、結局同じことを繰り返していないかなというか、それを、昔あった大変なことを忘れないためじゃなくて、そういう文化をつくっていくというふうな、そういうアフォーダンスを持たせるということがミッションじゃないかなと個人的には思ったんですけれども、すいません、どこにも貼れないのかもしれないけれども。その日常性にいかにかませられるかというか、大事な要素だなとちょっと思ったんですけれども。

○本江副委員長

それは「①空間」のあり方としてあらわれる。

○植田委員

そうですね、はい。

○本江副委員長

もうちょっとシンボリックなこともあるかもわかりませんが。シンボリックだと余り、そのこと自体が日常化しないとだめか。ありがとうございます。

○佐藤（泰）委員

「②施設」の話ですけれども、施設をつくるんだったら確かに人が来なきゃ意味がないんですが、ただ今後、今の考えていることの中で、人がどれだけ行きたいと思えることができるのかということを、それは本当によく考えないといけないと思うんですね。人が集まるためにはその理由がやはりあるんだけれども、学びたいとかっていうことが動機でドカドカと人が集まるということはやはりそれは不可能だし、行きたいと思わせる何かがあれば集まるということであって、それが今回、我々が議論している事業全体の中で一体それがどうあり得るのかということを抽出して、それがもし抽出できるんだったらそれをやることも検討すべきかもしれないんだけれども、それはないけれどもちょっとやはり必要かなというのは、結局本当に人が集まらない。どんなにアクセスがよくても人が集まらない結果になってしまうので、どうしても施設をつくるというときに、いやこれだけでは集まらないから何かついでに来られるような仕掛けを考えるとか、そういうことも含めて、どうやったら施設というのが成り立つかということは、考えなきゃいけないと思うんですね。私は基本すごくそれは簡単なことではないと思うので、安易につくるということを前提にすべきではないし、あくまでそこでどういうミッションを持ってどういう活動をするかということを最優先課題としてほしいと思って、その結果として施設を考えるんだったら、ここにどうやったら本当に人が集まるか、人が集まる中身があり得るのかということを真剣に議論する必要があるかなと思います。

○本江副委員等

もちろんそうですね。中身としてということもあるし、ついで利用もあるでしょうし。

○野家委員長

さっきから人をどう集めるかというのが一番大事なことだと思うんですけれども、それにはやはり一度見たら終わりじゃなくて、リピーターができるような装置が必要だと思うんですね。例えば、教育委員会と連携して、市内、県内の小学校の遠足に一度来るような場所にして、小学校のときに行き、中学校、高校に行くとだんだんアーカイブとかそういったところまで興味を持つとか、人生の中で何度か繰り返し来るような場所にすることが必要で、そのためにはカフェとかレストランが充実していることが大事だろうと思います。

それからもう一つは、「⑥モニュメント」のところで、佐藤さんが「あり得ないものを可視化する」というのはどういうことになるかなとさっきから考えていたんだけれども、泉ヶ岳に裏のほうに岩の間をくぐる胎内くぐりコースというのがありますね。例えば岩の間をくぐって一旦暗闇の中に入り、もう一遍出てくるようなモニュメントがあれば子供たちは喜ぶと思いますし、そういった意味では見えないものの可視化というテーマの一つになり得るかなと思いました。

○本江副委員長

物でなくてね。ありがとうございました。時間が結構あれですが、どうでしょうか。もうちょっと聞くかな。欄外のものがいっぱいありますが、それでも具体的にそれぞれを考えていくとこういう要素でなくちゃいけないなという話ができつつあるかなと思いました。ちょっと時間も足りないので余りちゃんと埋まってないけれども。これはもうちょっと続けなくちゃいけないような気がします。

もう1個、今日のうちに少し話しておきたい、頭出しをしておきたいことが、力点をどう置くかというパターンの話。やらなきゃいけないことはいろいろとあるんですが、重心をあえて偏らせるなら、こういうあり方があり得ると思いますということを、1つでも2つでも挙げていただければ。

○佐藤（翔）委員

力点というか、整理の仕方ですけれども、今日の話の中で、真ん中に持ってこないシリーズがあったじゃないですか、モニュメントとか場とか。何かそういうものを許す報告書にしていただきたいなと思っていて、真ん中に集めるものの報告書が成果物ですけれども、そうじゃないものも今回のリポートに入れていただけると大変ありがたいなと思いました。

○本江副委員長

具体的にはどういうふうなものなんだろう。

○佐藤（翔）委員

何だろう、拠点という言葉だと、モニュメント、例えば私たちが申し上げた各地域にあるモニュメントが漏れちゃいそうなので、そういうのを何か受け皿にしていただいたらいいなと。

○本江副委員長

そうですね、分散型のものもあり得るよとか。

○佐藤（翔）委員

対象としては、本江先生が委員をされた前回の震災復興メモリアル等検討委員会ぐらいの枠組みのものでもいいんじゃないかなと。

○本江副委員長

書きぶりね。

○佐藤（翔）委員

書きぶりがそのぐらいであれば、さっきおっしゃった今ある施設の集約、再統合みたいなことも入ってくるかなと。

○本江副委員長

ちょっと質問が難しいけれども、どうですか。

○志賀委員

仙台市を見渡して、ここがいいみたいに決められるわけでは全くなくて、仙台市内だからどこも同じということは絶対にないと思う。サイトスペシフィックな場所ということで、仙台市の中でも特に重要な場所を、地図を見るのか、実際にまちを歩くとか、場所を掘り下げることが必要で、あとは場所と人ということでその２つが力点になるのではないかなと思います。

○本江副委員長

場所はどうやって決めるんですかね。たまたま使っても大丈夫そうなところが湧いてきて、ここはどうだみたいなね。

○志賀委員

あと、だから、分散させるということはとりあえず当然あると思うので、当然あるにしても、アゴラ（広場）のような場所を持つ、それがどこなのか、道なのかとか。

分散させるでちょっと思い出したのが、ブルー・プラークの例。私、石巻に行くことが多くて、こっちもそうだけれども、どれぐらい津波が来たかというのが電信柱に書いてあります。それはかなり想像を刺激する。この辺だとこれぐらいかというので、やはり物すごく注意して見るようになるし、たった一線なんだけれども、そういうことというのはものすごく大きい。というのは、今立っている場所がどれぐらい海から何メートルかというのもわからないし、そういう地理的なことを思ったりしましたけれども、そこにプラス物語が重なるので、想像力がものすごく、こちら側が考える力になるというか。

○本江副委員長

そうですね。ほか、どうでしょうか。どこかに満遍なくじゃないとするとこういうあり方があるんじゃないかという話にしたいんだけれども。

○佐藤（泰）委員

拠点というと何か集めるという感覚だと思うんだけれども、私からすると分散型の状態を維持することというのはすごく大変なんだと思うんですね。分散していると遠心力でばらばらになって終わってしまう。遠心力がないと分散した状態はなくなる。遠心力と求心力と両方がバランスよく維持されて初めて分散型のものがある種その状態を維持し得るというか、継続し得るんだと思うんですけれども、それを維持するものこそが拠点だと思うんですね。

つまりいろんな人たちがいろんな形で参加していたり、いろんな地域の活動があったりいろんな地域のメモリーがあって、それらがバラバラだとそれぞれ壊れていったりなくなったり、それをトータルとして存続できるような状態として、それをある意味支えるような求心力を時に働かせたり、あるいは中心にある力を外に広げてパワーアップするような、そういうようなことをずっとやり続けるのが拠点の役割だと思うんですね。何かそういう言い方もあるんじゃないか、拠点自体は私はそういうイメージがあります。

○佐藤（翔）委員

単純で恐縮なんですけれども、今、力点はどこかというお話なんで、基本的にはきょうここに出た付箋の分布が力点を象徴しているんじゃないかなと思います。多分、人づくりゾーンが多くて、あとやはり展示施設ゾーンも多いし、モニュメントは真ん中にあるものとエリアにあるものと、あとアーカイブ、フューチャーセンターが結構多いので、今日はそれが出てきたということはそれが力点じゃないかと素直に思いますね、メディアとか全く発想なかったですし。

あと僕、非常に自分で残念なんですけれども、広域的な連携というのが全く自分の中で出てこなかったので、これも実はもしかしたら役割そのものからなくなってもしようがないのかなと、きょう考えながら思っていました。

このカードの分布が今日は大事だと思います。

○本江副委員長

そうですね。一方で、遠心力、求心力の話を聞きながら、これは司会じゃなくて私の意見として言うと、広域的な連携をやるということが今回の仙台市の中心部拠点の役割に入っているのは、既にいろんなところにメモリアルなんとかがあって、もちろんそれぞれに頑張っているのだけれども、それらがそういう意味ではある相互連携みたいなことの役をやると言っている人はいなくて、それぞれのところでやっていますという感じにちょっとなっているから、本当は国がやれと言いたいところですが、そうじゃなくて同じ立場だけれども、それをつなぐ役を買って出る役みたいなイメージがここにはきっとあるのかなと思っていて、だから、僕が繰り返しお願いをしているあり方のパターンで言うと、自分自身はそんなにコンテンツがなくてもよくて、いろんなところとの連携で、あっちではこれをやっていますよというようなことを、交通が便利だから入り口として引き受けて、そこからこんなことをやっていますよということを言って回る。あっちでやっていることとこっちでやっていることは似ているから、一緒に何かやったらどうですかということを言って回るようなことが大きな仕事で、自分では持たない。アートのことで言えば、美術館じゃなく、収蔵品を持たないアートセンターになって、いろんな企画を次々やる。その企画に必要なミーティングをやったりするようなことについてはすごく一生懸命やる。それで何か手柄はどこか別のところでやってもらっても構わなくて、それが動くようになったということでよしとするというか、何かそういう役回りというのもあるのかなというのが一つのすごくシンプルなパターン、分散型を究極的にやるとそうで、サーバーだけがある。逆に一方で、何もかもコレクションする大英博物館みたいになるというのもあると思うんですけれども。

○佐藤（翔）委員

今、先生がおっしゃったのは、「⑭組織」の「(4) 広域的連携」みたいなところに当てはまる。

○本江副委員長

そうですね。あとちょっとしか時間がないんだけれども、どうでしょうかね、そんな感じで。

○大泉委員

今の本江先生の発想に結構刺激を受けたんですけれども、何となくNPOで言えば、それぞれの課題を持った世の中にNPOがあるわけですけれども、宮城、仙台にはその中間支援の団体が2つあって、そこは個別ミッションを持っているかというとそうではなくて、いろんな個別ミッションを持ったNPOを支えたり、連携し合う場を用意している。せんだい・みやぎNPOセンターであり、宮城県のゆるるさんがやっているところと2つあるわけですけれども、それの震災版という発想は僕にはちょっとなかったので、そうすると巨大な展示とかなんとかはそれぞれ今あるものがあるよねと、足りないものがあるんだったらそれ足してみないかと助言したり、ここをそっちで担ってもらえるとみんな助かるんだよねと言ってみたりみたいな全体コーディネートを担う拠点があって、それは特段収蔵品がないというのは、もしかすると今世の中に欠けているのはそういうことかなという気もしました。

一方で、佐藤先生がおっしゃった、人が集まる中身はあり得るのか、さっきから僕、集客と言っているんですけれども、今度のシンポジウムでも聞いてみたいなと思うんですよね。私自身も例えば広島の平和資料館に行ったときに、何で俺は行ったんだろうという、そこにいっぱい人が来ているわけですよね。何で行ったんだろうという理由を考えたときに、自分が被爆しないためになのか、自分が核のボタンを押さないためになのか、会ったことのない誰かに手を合わせたかったのか、よくわからないまま僕は行ったんですよね。でも、ああやってみんな集っているわけじゃないですか。年々増えているわけですよね。

なので、我々がもし人が集まる施設をつくるんだったら何がなくちゃいけないのかというのもやはりちょっと、言われてみるとわかったようでわかってないなという気もしたので、ちょっとそこは今度のシンポジウムでもそういうのは聞いてみたいというか、学んでみたいなと思います。

○本江副委員長

どこかで何か単にプラクティカルな防災教育の拠点みたいなことを超えた何かになればいいというものじゃないのかな。

○大泉委員

実は一方で、安っぽいので「免罪符」と書いたんですけれども、例えば学校の先生は、ここにさえ行っていれば防災教育やったってことになるとかね。でも、やはり本当にそう思って連れていく先生もいるでしょうし、行っときゃいいんだという人もいるんだと思います。「これで平和教育はやりました」みたいな。なので、それをむげにしてもいけないような気がするので、そういうのもどこかで逃げ道をつくってあげるというのも大事だと思うので、そこを逆手にとって、そういう軽い理由でというか、表面的に来た人もちゃんと、内実がちゃんと伝わるみたいなのもあると思うんです。

何で平和記念資料館に行ったのかということに、自分自身の答えが出ないのが、ここでも同じことを問われるのかなという気がしました。

○本江副委員長

ありがとうございます。

アーカイブとずっと出ているんですけれども、図書館や博物館、災害研もあるが、仙

台市オリジナルのアーカイブとして、収蔵空間と、それを管理し、意味を見つけ出す人たちを入れた組織と施設を持つんだということもあれば、自身は持たずにインデックスだけをつくるようなこともあり得る。

○佐藤（翔）委員
　イメージとしてはそれに近いですね。

○本江副委員長
　アーカイブのあり方についてはいろいろなパターンがありそうです。

○志賀委員
　今、本江さんの話を聞いたりして、これも全然確かではないですが、わからないことなんですけれども、「ステーション」。仙台駅みたいにいろいろなものが交差する広場、アゴラ、ステーション。

○本江副委員長
　空間全体の内容のイメージとしてね。

○志賀委員
　そういう意味での拠点とも言うでしょうか。そこには公共の中にある「自由」の余白がある気がして。うまく言えないですけれども、今日聞いていて思いました。拠点というよりステーションというか。

○本江副委員長
　駅というのは、それ自体が目的地じゃないからね。みんな来るけれども、そこに来るんじゃなくて、そこを通ってどっちに行くか考える。場のイメージとしてはそういうのもあると。みっちりとしたミュージアムというのもあるけどね。
　そのシンボリックな場所というのはいろいろ出てくるんだけれども、これがいろんなところにある、だからそれのステーションになる。それはシンボルについてもそういうことがあり得ると思います。原爆ドームであったり、何か写真に撮ったりして、震災というといつも出てくる絵、その背景みたいな何か強力なモニュメントというのは、何かそういうものはある？余りない？
　そのための場として、広場とかクラクフとか駅舎みたいなものもあるけれど、それよりは、ガーっと空間が空いて線路だけあるみたいなのところが、シンボリックな場として機能しているみたいなことはありますよね。そういうモニュメントがあるとして、そのあり方はどうかというのもいろいろなパターンがあるかなと思います。
　展示の、ステーションとミュージアムみたいなのって言い方としては、アーカイブが中心でしたけれども、その展示周りのところで幾つか、あり方のパターンがあるでしょうか。分散配置のものと割と集約したものがあるけど、どうでしょう。

○志賀委員
　展示となったときに、まず目で見えるものと想像するものと聞こえるものと、身体の

中にいろいろな感じる機能があって、それを越して、体の中で何かを考え始めるということが始まる。それはあるとして、だから音だとか展示だとか情報だとかということだと思うんですけれども、例えば写真とか映像というものをどう扱うか。例えば写真となったときに、実際に亡くなった人の写真を集める、それってどうなのとか。もしくは実際に震災で流れてしまった写真を集めて、それを洗浄して、もとのある人にまた戻すというようなことが沿岸部でたくさんあって、私もそれをやっていましたが、やはりそうなったときに、写真洗浄の会場では、展示されるということと、その機能というのがばっちり合っていたんですね。写真は展示されていなければ見つけられない、という強い意味がありました。これはすごく難しいことだと思うんですが、そのような意味をしっかり持つことが展示には必要になってきて、その上において、抽象度を高めることで始めて語られる内容が、その奥行きを保てるのだと思います。

○本江副委員長

ありがとうございます。展示のあり方についての話でした。今のはよくわかります、そういうものであるべき。

ごめんなさい、もう時間なので、終わらせる感じでいきますけれども、パターンがどうあり得るかというのは、幾つかの軸、ステーション的なものから重いもの、モニュメントも集約的なものか、分散的なものとか幾つか対比的なあり方の視点があったと思いますので、それの組み合わせで幾つかパターンのセットがつくれるかなと思いますので、少しそうした整理をしていただければいいのかなと思って聞きました。

そんなことで、ちょっと時間を超過してしまいましたが、1 時間半ぐらいですので、この辺で、一旦は終わりにしようかと思いますが、まだ言い残したことがあれば、一言二言、どうでしょうか。

○野家委員長

今のまとめで結構だと思います。ケーススタディーのパターンとして、1 つ目はさっき本江さんが言った大英博物館方式で、施設を中心にしてその周辺にいろいろなネットワークをつくる。2 つ目はコンコルド広場というか、広場型あるいは公園型で、そこにいろんなイベントがある。3 つ目は、遠心力と求心力を発揮して広域連携するパターン。拠点としては空虚な場所なんだけれども、いろんな外の力を結集するような集約点というか、それだと一番重要なのは組織と人材ですよね。よほど優秀なコーディネーターがいないと四分五裂してしまうと。今だと施設型と広場型とネットワーク型というか、3 つぐらいにまとめられるのかなと思いました。

○本江副委員長

そうですね、ありがとうございます。広域はネットワーク、そういうことは言えるかと思います。それでは、先ほどのようなまとめで、一旦は終わりということにしたいと思います。

○野家委員長

どうもありがとうございました。

せっかく議論が深まってきたところですが、残念ながら時間が既に予定の時間を超過

していますので、本日はこの辺のところで区切らせていただきます。
　それで、これから事務局のほうでケーススタディーという形で進めていくということを最初に言っていただきましたので、私はもとより、副委員長を初め必要に応じて、今日発言いただいた各委員の方々のアイデアを適宜調整しながらこれから進めていくことになるかと思いますので、よろしくご協力のほどをお願いしたいと思います。
　じゃとりあえず、次の議事に移りたいと思いますが、2 番目は今後のスケジュールについてということで、事務局から資料の説明をお願いします。資料 4 でしょうか、よろしくどうぞ。

○事務局（庄子課長）
　それでは、今後のスケジュールについて説明いたします。
　本日10月28日が第5回検討委員会、後ほど説明いたしますが、11月10日に世界防災フォーラムのほうでシンポジウムをいたします。その後ですが、第6回検討委員会から第10回検討委員会まで書いてございますけれども、今後、具体像、機能の検討を進めていきます。このうち1回、また9月1日の第4回検討委員会と同様の市民参加型の検討委員会を開きたいと考えております。その後、夏ぐらいまでに報告書を取りまとめしていただきまして、パブリックコメントを得て基本構想を策定というふうにしていきたいと思います。議論、検討の進行状況により全体のスケジュールは柔軟に対応したいと思っております。以上です。

○野家委員長
　どうもありがとうございました。ただいま説明いただいた件につきまして、今後のスケジュールについて皆さんのほうからご質問、ご提案等ありましたらお願いします。どうぞ。

○遠藤委員
　委員会のスケジュールということではないんですけれども、今までの話し合いの中でも、やはり取り組みをどんどん優先して進める必要があるんじゃないかというお話があったかと思うんですが、やはり来年2020年度にどんな事業や取り組みをするのかというのが本当に大切になると思うんですよね。こういった節目のときにどのぐらい仙台市の人も近隣の人も遠方の人も関心を持ってこれに関わってくれるのか、その機会をじゃあ仙台としてもどうつくっていくのか、そういうことがあって人が集まるということにつながっていくと思うんですけれども、そういうターニングポイントで深まりとか集まりとか盛り上がりとかっていうのがちょっと少ないと何か大丈夫かなという感じになっていくかなと思うので、何か来年度の方向性みたいな、メモリアルの視点を市内外で盛り上げるみたいな観点でご予定があれば、委員会とも大なり小なり関係してくると思いますので、教えていただけたらなと思います。

○野家委員長
　何か事務局のほうでありましたらお願いします

○事務局（庄子課長）

来年、おっしゃるとおり震災10年の契機というところで、今いろいろ予算を計上しているところでして、この段階では確実に何をやりますと言えないんですけれども、方向性として、少なくとも荒浜小、メモリアル交流館、10年を契機として今後に続けていく機運を高めることはしていかなければならないと考えております。また、市の職員に関しても、震災後に入庁してきた職員や震災を知らない地域からいらっしゃった職員なども増えておりまして、まずは職員自身も震災の部分をしっかり勉強して伝えていける体制を整えなければならないと考えております。

あとは、この基本構想が策定されることによって、これを発信していくのが一つの大きな機運の醸成になると考えております。よろしくお願いいたします。

○野家委員長

ありがとうございました。ほかに何かご意見、ご提案等ありますか。どうぞ。

○本江副委員長

10日のシンポジウムのチラシを入れていただいております。僭越ですけれども、本来であれば野家先生が行かれるべきところですが、ご都合がつかないということですので、代役で私が検討状況のご説明をするというところでございますので、何かこういうことを言えというようなことがありましたら事前にご一報いただければ、それを踏まえてお話をするようにしたいと思います。何か冒頭に少し私から説明をする時間があって、あと皆さんの意見を聞いて最後にまたコメントするということがあるようですので、何かこういう機会を捉えて、先ほどの機運醸成も含めて、こうした態度で臨むべきではないかというのがありましたら、ぜひお知らせください。

○野家委員長

ありがとうございました。この11月10日のシンポジウム、私は前から京都出張が決まっていまして、残念ながら出られませんので、本江先生に押しつけてしまって申しわけないんですが、これまでの検討結果の報告は本江先生のほうが一番把握しておられるので、適任だと思います。

それから、パネリストとしては池澤夏樹さんをお呼びすることになりましたので、池澤さんは震災直後からいろんな発信をされている方ですので、また興味深いシンポジウムになるのではないかと思っていますので、よろしくご参加のほどお願いしたいと思います。

その他ということですが、今、このシンポジウムについて本江先生から紹介ありましたけれども、何か事務局からありましたら。

○事務局（庄子課長）

はい、ありがとうございます。事務局からは、改めて今後の日程と申しますか、座席表の裏面に11月10日の震災メモリアルシンポジウム、それから第6回中心部震災メモリアル拠点検討委員会が来年1月ごろを予定しているということを書いております。

今、本江先生、野家先生からお話しいただきましたメモリアルのシンポジウムですが、こちらは一般公開セッションとなっておりまして、入場無料でどなたでも聴講できますので、お時間の許す範囲で足をお運びいただければと思います。

2点目、次回の第6回検討委員会ですが、1月を予定しておるのですが、具体像のケーススタディーの進行状況によりまして開催時期が変わる可能性がございます。開催の日時と会場につきましては、追ってお知らせいたします。傍聴の方にはホームページなどでお知らせしたいと思っております。

以上が事務局からの連絡でございます。よろしくお願いいたします。

○野家委員長

ありがとうございました。

委員の皆様方からも何か言い残したこととかありましたら、よろしいでしょうか。

それでは、事務局に進行を引き継ぎますので、よろしくお願いします。

○事務局（庄子課長）

本日も長時間のご議論、ありがとうございました。以上をもちまして、第5回中心部震災メモリアル拠点検討委員会を閉会いたします。ありがとうございました。